

うさぎドロップ



平成 25 年 7 月 6 日 (土)、映画「うさぎドロップ」(2011 年 / 日本) の上映会を開催しました。今回は新しい試みとして、映画上映前と上映後にゲストの松山市小中学校 PTA 連合会 顧問 中村和憲さんのお話を聞きました。

上映前のミニトークの様子

Q1) 中村さんは社会人から 3 歳の子どもさんまで、5 人の子どもさんがおられますが、最初の子どもさんと 5 番目の子どもさんでは、親として変わったとことがありますか？



A1) 末っ子は 4 月から保育園に行くようになりました。昔は親がハンカチを選んで「ハイ、これ」と渡していました。今は子どもに選ばせています。また、長靴が好きで天候に関わらずはいてきたがるのですが、これも子どもに選ばせません。やがて本人も長靴では遊びにくいとわかって、子どもから「長靴は雨の日だね」と言うようになりました。最近、子どもが結論にたどり着くまでの時間を一緒に楽しめるようになりました。

Q2) 子育てで、これは「父親の仕事」として力を入れていることはありますか？



A2) 先日、妻と話をしていたことがあります。私自身は「いい夫でありたい」「いい父親でありたい」と一生懸命頑張ってきました。男性は洗い物をしたり、大工仕事をしたり、大変そうな家事を手伝うなど、目に見えるところで頑張ろうとしますが、私もそうでした。でも、妻が望んでいたのはそうした目に見えることではなく、「そばにいて話を聞いてほしい」ことだったのです。



上映後の中村和憲さんのトークより

ある時、『命』について考えるようになりました。両親が会って、私たちに命をつないでくれました。その両親の前はというと、おじいちゃんとおばあちゃんが命をつないでくれたんですね。父方のおじいちゃんおばあちゃん、母方のおじいちゃんおばあちゃんといったわけですよ。

そうすると、もうこれは遠い過去からずーっとつながって生きているんだなあと思いました。一体どれくらいの命が私たちにつながっているのだろうということを知りたくなって、数えてみました。26代前まで合算してみて、そこで私は一回計算をやめました。26代前と言っても、700年くらいになると思います。700年くらいさかのぼると、何人の方がつながっていると思いますか？1億3421万7726人。日本の人口を超えたのでここで計算をやめたんです。これが30代前までさかのぼると、10億人を超えます。つまり命そのものが奇跡であって、わたしたちはその中で出会ったのです。出会って結婚して、子どもを授かることは奇跡の中の最たるものなかもしれません。

相田みつをさんという詩人の書いた詩の中にこんな作品があるんです。

『過去無量の いのちのバトンを受けついでいまここに自分の番を生きている』

私たちはひとりひとりその命のリレーを、自分の番を、今こうして生きているわけです。命のリレーをつないだら、その後大切なことは、お互いを応援しあうことなんだなと思ったんです。大人の役割は子どもたちを応援すること。お互いの命そのものを応援しあうことが人生のかなという風に思うようになりました。私たちはそのつながる命のリレーの中の今を生きているお互いだという事をこの映画を観て改めて、思いを新たにいたしました。
(取材:市民リポーター久保 洋美)





市民リポーター 久保洋美さん より

今回の映画を観て、私の胸に去来したのは夫のことでした。我が家にはハンディキャップのある娘がいます。映画の中で、主人公のダイキチが残業のない課に異動を申し出る場面がありました。それを見ていてかつての夫と重なる部分がありました。

娘の病気と障がいがあったのは、夫が30代後半の仕事にもやりがいを感じていた頃、転勤先で管理職として早朝から深夜まで働きづめの日々を送っていた時のことです。

ひと月に何度も仕事を途中で抜けて、都会に慣れない私と娘のために一緒に病院の検査や受診に付き合ってくれ、精神的にも疲れ果てた私をサポートするために土日は家族サービスで遠くまで遊びに出かけ…。そんな日々を4年ほど過ごしましたが、最終的に夫は勤務していた企業を辞めて実家のある愛媛に家族と一緒に帰る決意をしたのです。現在19歳になる娘が2歳のころの話です。まだイクメンなんて言葉も当然ない時代。家庭を顧みる暇がある男性はほとんどいませんでした。今思えば、当時夫は何も言わなかったけれど、子どもの受診のために仕事を抜けてよく付き合ってくれたものだと思います。その間、さらに遠い場所に転勤の話が出ましたが、障がいのある子どもの病院や保育園をかわるのは手続きがとんでもなく面倒で家族の精神的な疲労は計り知れないことを知っていたため、できるだけ近くへの異動を申し出てくれたこともありました。

中村さんのお話にあった、命のリレーをつなぐという作業は、障がいのある子どもを持つとさらに強く感じます。いつ消えるとも限らない子どもの命を守る仕事。大事なもの、人、普段意識したことはあまりないかもしれませんが、身近にいる大切な人のことを失ってみて初めてわかるのではいけないということ。

命がつながる不思議は、決して不思議なことではなく、その時代時代を生きた名もなき人たちの努力のあかしなのだと今回の映画を観て、またお話を聞いてつくづく感じました。

(市民リポーター:久保 洋美)





中村和憲さんがコメントをよせてくださいました!



素敵な時間でした。忙しい日常の中であってこの2時間は一人ひとりが自分と向き合うことができた貴重な時間でした。映画のあと、会場みんなの心の中にあふれていた言葉にできない温かいもの、それが愛。幸せの青い鳥は一人ひとりのすぐそばにいますね。そんな小さな幸せにたくさん気づけることが本当の幸せなのだと思います。私たちはみな、命のルーの中で今、「自分の番を生きている」お互い。その中での出会いやつながり、その一つ一つが奇跡であることに気づくとき、私たちの心にはきっと愛があふれ、もっと優しくなれる、そんな思いを感じさせてくれた時間でした。大切なこと、大切な人をたいせつに生きていきたいですね。ありがとうございました。

アンケートより

7歳男の子の
こんな感想も!

おやになると、どの
ぐらいたいへんな
んだなあとと思った
(7歳男性)

家族の「愛」というものは
すばらしいと、映画を観
て、中村さんのお話をお
聞きして感じた
(20代男性)

中村さんのお話の中での、目
に見えることをするのが子育て
てなのではなく、目に見えない
こと、心の支えになることも
大事な子育てである、という
言葉が印象的だった
(20代女性)

お子さんと一緒
に参加の
お母さんより

自分たちがどれだけ皆に愛さ
れ、大切にされ、唯一無二の
存在であることを感じてもら
えたのであれば幸いです。改
めて、わが子に対して、感謝
や大切にできる気持ちが沸い
てきた(30代女性)

とまどいながらも一生懸命
な大人の姿を見て子ども
は成長していくのだと
強く感じた(50代女性)

今回の映画上映会とミニトークには 140 人もの方にご来場いただき本当にありがとうございました。